

まんだら通信

第224号 (通巻259号)

平成27年02月 西暦2015年 佛暦2581年 皇紀2675年

安房国八十八ヶ所 第一番札所
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org

お四国病院

お大師さまが、高野山を真言密教の修行道場としてお開きになって、今年には千二百年になるそうで、テレビでも時々放送されます。

NHKの『新日本風土記』もお遍路の話題を放送していましたが、ご覧になった方もおいかと思ひます。

阿波の国(徳島県)の第一番札所霊山寺を皮切りに、土佐の国(高知県)から伊予の国(愛媛県)を経て、お大師さまの生まれ故郷、讃岐の国(香川県)八十八番大窪寺に至る、右回り千四百キロ、歩いて五十日の長旅です。

千四百キロは、千葉と白浜を七往復する距離ですが、場所に



よつては『へんろころがし』の名の通り、ごろごろした岩ばかりの、足場の悪い狭い上り坂が十五キロ、半日も続く場所があったりと、『修行』にふさわしい厳しい旅です。

何年か前から、お遍路をする人が右肩上がりに増えていて、お寺さん主催でバスなどを使う、団体お遍路も多くなっているようですが、『歩き遍路』も同じように増えているという事です。こちらは、若者や外国人が多いというのも特徴だとか。

毎日の新聞・テレビを見ていて改めて考えると、『敗戦国ニッポン』は今、世界一問題の少ない国で、世界一お金持ちでもあります。それは恐らく、縄文時代から培われた『自分のためだけになく、他の人の立場も考える』という思いが、一番根っこにあるためだと私は考えます。

片方、職場の人間関係がうまく行かない、選んだ職業が自分に合わない、学校に行く気がしない、などの理由で悩んでいる人が多いということです。

「みんなががんばっていることだから、しつかりしなさい。」と言いたくなりませんが、『うつ』に悩む人が多いということとは、それほど簡単ではないということとです。

思い悩んだ末、お遍路に行けばなにかあるかも知れないと、休日をやりくりして、白装束に金剛杖、菅笠に寝袋と簡単な雨具、僅かの着替えを入れたリュックを背負って、お四国に行きます。

四国の人たちは、お遍路さんを、それはそれは大事にするそうです。

功徳を積みたなどと思う前に、お遍路さんを見ると体が自然に動いてしまつて、食べかけのミカンや焼き芋を差し出し、お昼近くだからとおにぎりを作って待ち、それが夕方なら宿と夕食を提供する…。

門前の幼稚園の子供たちが、園舎の

庭のウメをもちで漬けた梅干しでお接待するなど、子供のころからお接待に慣れています。そのように、ご先祖以来ずっと続いた習わしなので、自然にしていることですが、お接待を受けた上に手を合わせて拝まれる…、お遍路さんは見ず知らずの人の親切にびつくり仰天するわけですね。

来る日も来る日も重い足を引きずり、お接待を受けながら、たつぷりの時間を自分との対話で過ごすうちに、「人は、人が喜ぶ事をするのが一番の幸せ」に気付くのです。

だから、四国遍路はまた『お四国病院』とも言うそうです。

日本国憲法

数日前から、安倍総理大臣が「憲法改正の手続きを考えなければならぬ。」と言い始めました。独立後六十年あまり、あまりにも遅すぎたと思ひますが、「平和憲法を一字一句変えてはならない」という、朝日新聞などに代表される、所謂「護憲派」の見当違いの勢いが、それほどまでに強いということです。

大東亜戦争に敗れて、歴史始まって以来初めて、外国の支配を受けることになりました。時の幣原内閣は、新しい憲法の草案をマッカーサーに示しましたが、日本軍の強さを身にしみ返されたマッカーサーに、にべもなく突き返され「これにしなさい」と英文の草案を渡されました。泣く子とマッカーサーには勝てない時代のこと、大急ぎで殆ど丸写しで翻訳したのが、現在の『日本国憲法』です。

一部の学者や評論家は以前から、独立国にふさわしい自前の憲法に変えるべきだと言っていました。が、「世界一の平和憲法だ」という教育しかされてない国民には、成立のいきさつなど知る由もないのです。

国会図書館には原本があつて、誰でも読むことが出来るし、ネット上にも多分あるはずですが、もともと、戦争に勝つても相手の領土を分捕つてはならない(北方四島と樺太の南半分は日本の領土。竹島については韓国は戦争相手ではないのですが、いわば火事場泥棒)、法律を

いじつてはならない、などの国際条約があるにも関わらずです。

中でも不思議なのは、前文に「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、我らの安全と生存を保持しよう」と決意した云々。という有名な文言があります。憲法も広い意味では道具ですから、誰が読んでも、つまり法律の専門家でなくても、理解できなければなりません。そうすると、普通の年寄りの私はどう読んでも、日本人が考えるような「信頼してもよい平和を愛する国」って、世界のどこにもないこと思い当たります。

この前文を受けて、これも有名な第九条では「だから戦力は一切持たないし、まして使うこともない。」ということになります。

日本人が大好きな国連が、国家には自衛権という固有の権利がある、と言っているのにです。悪意を持って殴られたら殴り返して宜しい、と言うことですね。

実行するしないではなく、我が国には殴り返す用意があるよということ、殴りたい相手に思いとどまらせ、お互いに悲惨な結果になることを防ぐということです。

これを抑止力ですね。核を除けば世界最強級の自衛隊の、手かせ足かせを外すことで、竹島や北方領土、沖縄や小笠原の貴重なサンゴを守ることも出来、北朝鮮に囚われたままの同胞を救い出す、強い手がかかりにもなることでしょう。

にっぽん人情小噺 落語家 三遊亭鳳豊 第一〇八話 校舎

新年明けましておめでとうございます。初詣にはお出かけになりましたか。神社も良いのですけれど、私たちはできるだけ、新年はお寺さんを参ることにまつていましてね。

まあ、そのお寺さんでもできれば、お坊さんがたくさんいらっしゃるお寺ではなくて

ひっそりとして、そうですね、住職ひとりとその息子さんの二人だけのお寺が縁起がよいとされています。和尚がツー（お正月）なんて。今日は、実際に京都のお寺さんで起こったお話をいたしましょう。

ある由緒あるお寺さんで、五十回忌の法要がしめやかに営まれました。五十回忌というのは、なかなかできないものです。何しろ、亡くなられて五十年ということですから。祖父母の法要なら可能ですが……。

聞けば、施主さんのお母さんの五十回忌だそう、亡くなられたのは施主さんがまだ高校生頃。その施主さんから、とてもいいお話をうかがいましたので、ご紹介します。

施主さんのお母さんは、なんと八人姉妹の末っ子だったそうです。お母さんが四十代前半で入院されたとき、施主さんは、まだ高校生。しかも大病をして、学校を休んでいたのだそうです。お父さんは、施主さんが小学校に上がる頃までは、大阪で会社を経営し、一家は京都で暮らしていました。ところが事業に失敗し、夜逃げ同然で東京に出てきたのです。以来、立て直すことができず、一家は苦しい生活を強いられました。

そのときに駆けつけてくれたのが、お母さんの七人のお姉さんたち。病氣のお母さんが四十代ですから、お姉さんたちは五十代、六十代。もちろん、それぞれ縁あって、嫁いでいる。うち五人は京都に住んでいました。

施主さんにとっては伯母にあたる彼女たちが、どう打ち合わせをしたのでしょうか。「妹が大変だ」と、高校生だった施主さんの家に順番にやってきては、泊り込みで病院へ行き、戻ってきては、家事をやってくれたのだそうです。

「子供たちのためにも死んだらあかんよ。いつまでもこうして足運んでくるさかいに、しっかりと頑張るな！」

しかし、その甲斐もなく、お母さんは旅立

ちました。伯母さんとそのご主人たち、さらに、たくさんのいとこが葬儀の手伝いにやってきました。いとこは言え、施主さんの親と変わらない年頃の人もいました。

小さい頃、よく遊んでくれたお兄ちゃんたちの懐かしい顔もありました。

そのいとこのお兄ちゃん、高校生だった施主さんが病氣がちだということを知って、こう言いました。

「いいかい、とにかく生きなあかんよ。人間らしくな。人間の持つてる汚いことも、悲しいことも、そしてめつたにないけれど、美しいことがあったらそいつも、とにかく、これから起こるさまざまなこと、目をそむけんと、丸かぶりして生きていこな。いいか、死んだお母ちゃんに約束せい。『どんなことがあっても、生きていく』ってな。生きるのにつまずいたり、壁にぶちあたったら、俺たちがついてるから。偉くならなくたっていい。生きるよ。それが人間らしいちゅうことや」葬儀は、伯母さんたちのおかげもあって、無事に済ませることができました。それから、しばらくの間は、七人の伯母さんたちが心配をして訪ねてきては、家事をやってくれたそうです。

やがて、施主さんは病氣が治り、大学生になりました。

施主さんは、夏休みや春休みになると、毎年伯母さんたちの京都の家に長逗留しました。伯父さんの一人は、職人を何人か抱え、カーテンやテントの手配、ソファや椅子の張替えをしていました。「おお、よく来たなあ。おい」奥から、伯母さんの割烹着姿が見えます。化粧つけない浅黒い顔に、白い歯が印象的です。「よう来た、よう来た。おなかすいたやる、いま、ご飯にするさかいな」。いとこも「おい、元氣か。よかったな、病氣が治って」と肩を叩いてくれました。見れば、自分の家も貧しいけれど「ひよっとしたら、我が

家より」と思うほど、質素な生活でした。それでも、「ほら、いくらでもお食べ、ホンマによう来てくれた」と、あらんかぎりの御馳走でもてなしてくれました。

別の伯母さんは、大学の友だちを連れていったのに、一週間も泊めてくれました。

いとこのお兄さんのなかには、伯父さんを戦争で亡くし、中卒の人もいました。なんだか大学に行っていることが申し訳ない気持ちになったこともありました。

そして、今年が施主さんのお母さんの五十回忌。伯母さんや伯父さんはいまいません。昔お世話になったことを考えると、施主さんは涙が止まりませんでした。一番上のいとこは八十歳を越えています。

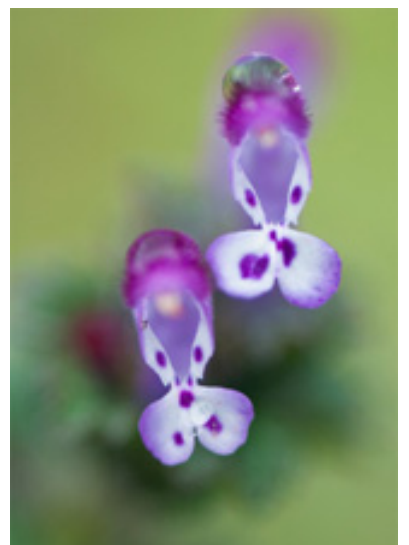
施主さんは、年上のいとこたちに連絡しました。「お母ちゃんの五十回忌を京都でやりませ。ぜひ、来てください。死んだおふくろが『ありがとう』と皆さんにいう日だから、手ぶらで来るんやで。絶対、何も受け取らんからね。法事だけど、お祭りや」

もちろん、参列者の足も用意し、お寺で法事を済ませると、超一流の料亭に豪華な料理を並べ、みんなで酒を酌み交わしたそうです。そのとき、施主さんは頭を下げてこう言いました。

「皆さん、本当にありがとうございました。皆さんのご両親にも、お世話になりました。ここで、おふくろにも言っておきましょうね。お母さん、あなたとお別れしてからもう五十年。僕は、あなたのお姉さんたちのおかげでここまで生きてこられました。お母さん、どうか、ここに集まってくれたみんなにひとりずつ、お礼を言ってください。献杯！」この施主さん、私の親友で、麗洋大学の真殿連教授です。

そうそう、この日のために何年も前から、一生懸命、貯金しておいたそうです。念のため。

とだとか。「滑走路を掘り返して、ご遺骨を総て本土に持ち替えるまでは、戦争が終わったとは言えないのです」と青山繁晴さんは『ぼくらの真実』（扶桑社）に書いています。▼今月の野草はホトケノザ【シソ科オドリコソウ属】畑や田んぼのあぜなどに、これから春にかけて沢山生えますから、誰でもおなじみです。花びらの形の面白さに魅かれて、精いっぱい近寄って写しました。大きさは5センチほど。造化の妙と言う言葉がありますが、神様はこんな小さなもので手抜きしないのです。蝶をくわえた、リスの顔のように見えます。



2015.02.09 龍歩

2日持ちこたえれば、その間は君たちの家族や恋人は生き長えることができる。だから自決などしてはならぬ」と。硫黄島は今、自衛隊と海上保安庁の職員、民間の施設保安要員数名がいて、一般人は立ち入り禁止だそうです。アメリカが占領したとき、遺品・遺骨を残したままコンクリートを流し込んで滑走路を造ったとか。その滑走路はそのまま今も使っているそうです。そのせいかどうか、幽霊というにはあまりにも生々しい人の気配が、至る所で感じられるそうです。食事をしていると、隣の席で食事をしている人の気配がはっきりと分かるなど、隊員の多くが日常的に経験する

▼節分が過ぎれば暦は春。本当の季節は、あと1ヶ月一番寒いのですが、庭の片隅にフキノトウが顔を出したり、日の出がそれと分かるほどに早くなったり、気分が暖かくなります。▼如月の望月の日、2月15日、お釈迦さまがインドのクシナガラでお涅槃に入られた日ですね。仏画家田治見美代子さんのご指導で、家内が描いた涅槃図を掛けて謝恩のお経をお唱えします。▼大戦末期、硫黄島に着任した栗林中将は、「玉砕戦法」を禁止したそうです。水は無く、地下壕の至る所から硫黄が吹き出し、70度にもなる炎熱の中、生還出来ないのなら、早く戦死する方が楽ですが「諸君が一日持ちこたえれば、本土爆撃が一日伸びる。

余滴

